国語科におけるＡＬ型授業の可能性
―漢文の学習についての分析を中心に―

キーワード:ＡＬ型授業　漢文教育　史伝　漢詩

広島県立福山誠之館高等学校　　山田　和大

はじめに

広島県では、平成26年12月に「広島版　学びの変革アクションプラン」を策定し、平成27年度から学びの変革を進める事業が開始されている。前任校の広島県立神辺旭高等学校は、教科の学習のカリキュラム開発などを主に行っており、筆者はその中核教員として業務に当たっていた。

この事業の一環として授業改善のための研究をしており、「アクティブ・ラーニング（ＡＬ）」型の授業開発をした。本稿では、平成27年度と平成28年度に行った漢文のＡＬ型授業の実践の紹介と、効果の検証をする。

１．ＡＬ型授業について

まず、アクティブ・ラーニング（あるいはアクティブラーニング）の定義を確認しておきたい。

もともと、アクティブ・ラーニングという言葉は1990年代のアメリカで、学習者の主体的な学びを目指すものとして提唱された。日本では、たとえば平成24年８月28日に出されたいわゆる「質的答申」の用語集などの中で定義が紹介されている。引用は省略するが、用語集に見えるのは、学習方法としてのアクティブ・ラーニングである。この内容を含ませた上で、さらに広い定義をしているのが溝上慎一氏である。氏は、

> 一方的な知識伝達型講義を聴くという（受動的）学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のこと。能動的な学習には、書く・話す・発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う。[1]

というふうに「アクティブラーニング」を定義している。これについて、溝上氏は、①「トランジション課題解決のために成長指標（目標）を学習と成長パラダイムに基づいて設定し、その実現のためにアクティブラーニングを導入せよ」というロジックを導入している点、②「活動への関与と認知プロセスの外化をセットにしてアクティブラーニングを定義している」[2]点において、質的答申の定義とは異なるため、「・」のない表記をしていると主張する。

筆者は、溝上氏が強調するこの二点を授業の中に取り込むことを考えている。さらにトランジション課題の中でも、学習に向かう態度の育成という点が重要だと考えている。たとえば、国語科の古典の学習に限定しても、現行学習指導要領にもうたわれているとおり、生涯にわたって古典に親しむ態度を育成することは重視されるべきものである。古典と個人が関わることは人生を豊かにしていくことにつながるからである。ＡＬ型授業は、この意欲を刺激していく可能性を持っているが、知識伝達型授業の多かった古典、特に〈権威的解釈域〉[3]を探ることに授業の焦点が置かれがちだった漢文の学習においても有効なのだろうか。有効であるとすれば、どのような授業が考えられるのであろうか。

２．単元構成と授業の流れ

本稿で紹介する実践は２つに絞る。いずれも、使用した教科書は東京書籍『精選古典Ｂ』で、前任校である広島県立神辺旭高等学校第３学年１学期での実践である。

まず、２つの実践の下敷きとなる理論的背景について整理しておく。２つの実践には、いずれのものにもパフォーマンス課題を導入した。パフォーマンス課題については、西岡加名恵氏が、

> パフォーマンス課題とは、リアルな文脈（あるいはシミュレーションの文脈）において、知識やスキルを総合して使いこなすことを求めるような課題である。[4]

と定義されている。これは、先に引用した溝上氏のＡＬの定義にある「認知プロセスの外化」をするための

方法の１つである。メリットとしては、①「生徒たちに実際に重要な知識やスキルを使わせることによって、確実に力をつけさせることができる」、②「教師は生徒がどのくらい深く思考できるようになっているのかを把握することができ」る、③「ゴールを明らかにすることで、活動の方向が定ま」る、④「思考する練習をつねに続けることで、長期的に思考力の成長を促していくことができ」る[5]という点が挙げられる。

このような定義から、パフォーマンス課題には一般に「思考力や判断力、表現力を培うための発展的な学習」というイメージがついてまわる。そのこと自体は誤りではないが、注意すべきは生徒のレディネスに沿っているかどうか、つまり生徒が少し手を伸ばせば届く課題となっているかどうかという点である[6]。レディネスという点に着目すると、生徒実態によって、パフォーマンス課題のレベル設定が変わってくる。前任校の実態に即して考えてみると、「読むこと」の授業におけるパフォーマンス課題は大きく２つの性質を持つものとして整理できる。１つは一般的なイメージでもある発展的な学習として、２つは読み取りを進めるための協働学習としてのものである。２つめを設定したのは、①とくに古典については独力で読み取りを進めることが難しい生徒が存在することや、②３年生の内容のレベルになると、文章の長さ、難易度ともに前任校生徒にとっては高いものであり、それなりの学力がある生徒でも読み取りに苦労することがあることが理由である。

なお、パフォーマンス課題を構成するときには、「Ｇ：何が目的か。」、「Ｒ：役割は何か。」、「Ａ：相手は誰か。」、「Ｓ：状況はどうか。」、「Ｐ：生み出すべき完成作品、パフォーマンスは何か。」、「Ｓ：評価の観点は何か。」を意識するとよいとされている。

以上のような理論的背景に基づき、読み取りを進めるためのパフォーマンス課題の例として、実践したものを以下に紹介する。まず、「背水陳」の授業である。（参考として、以下の授業についての筆者なりの構想図を論文末尾に付す）。

○教材　「韓信　背水陳」（『史記』）
○目標　本文の表現に即して、内容を的確に読み取る。
（古典Ｂ　３内容（１）指導事項　イ）
○展開（全６時間）
・韓信が背水の陣をしくまでの流れを、板書をもとに考えてまとめる（１時間）。
・背水の陣をしいてから、趙軍を破るまでの流れをグループで読み取る。その際、視覚的に理解できるように、戦略図を書くプリントとそれぞれの軍の名前が書いてあるカードを配付する。
・戦略図を用いて本文を読み取り、韓信の用いた戦略のポイントを整理する。（ここまで２時間）
・全体に向けてグループごとに、戦の流れ、韓信の戦略のポイントを発表する（１時間）。
・グループでの口語訳作り（１時間）。
・口語訳の返却と、句法等の解説（１時間）。
○本質的な問い
漢文本文の内容を表現に即して理解するにはどうしたらよいか。
○永続的理解
漢文本文の内容を表現に即して理解するには、単純に現代語訳をするのではなく、視覚化できる道具を用意し、表現を追ってその道具を操り、イメージを確固たるものにしていくとよい。

Ｇ　本文にある情報を視覚化し、韓信の戦略のポイントを明らかにして、わかりやすく説明する。
Ｒ　説明者。
Ａ　同じ教材を読んでいる他のグループの生徒。
Ｓ　教室の中で、皆が同じ教材を読んでいる状態。
Ｐ　戦の流れを整理し、韓信の戦略のポイントをわかりやすく説明する。
Ｓ　戦の流れが説明できる力（読む力）。
戦略のポイントが説明できる力（思考力・表現力）。
読み取りのための方法をメタ認知できる力（メタ認知能力、関心・意欲・態度）

第一の目標として、本文を読み、戦の流れを説明することに重点を置いた課題である。この、長い漢文を読み取るという点が生徒によっては、「少し手を伸ばせば届くレベル」となる。一方、推論を求めるレベルとして、戦略のポイントや戦略の意図を考え、説明させるレベルも設定し、グループの中で役割分担をしたり、互いの意見を出し合って高めたりするための協働学習もできるようにパフォーマンス課題を作った。

続いて、「月下独酌」の授業である。

○教材　李白「月下独酌」

○目標　漢詩の中に込められた感情を的確にとらえ、ものの見方、感じ方を豊かにする。

（古典Ｂ　３内容（１）指導事項　ウ）

○展開（全３時間）

・板書をもとに内容を読み取り、詩全体のあらましの理解をする（１時間）。

・グループで備後弁訳を作る（１時間）。

・備後弁訳の発表、関西弁訳、標準語訳の紹介（１時間）。

○本質的な問い

漢詩に込められた感情をとらえるにはどうしたらよいか。

○永続的理解

漢詩に込められた感情をとらえるには、まず詩のあらましを理解したうえで、一つ一つのことばを自分が普段使っていることばに近づけて訳せばよい。

Ｇ　「月下独酌」の備後弁訳を作る。

Ｒ　備後弁話者。

Ａ　同じ教材を読み、同じ方言を用いている生徒。

Ｓ　教室の中で、同じ備後弁話者がいる空間での発表。

Ｐ　「月下独酌」の備後弁訳を発表する。

Ｓ　内容が的確にとらえられる力（読む力）。

自己の方言と漢詩のことばを結びつける力（思考力・表現力）

読み取りのための方法をメタ認知できる力（メタ認知能力、関心・意欲・態度）

読み取りを進めた後に、詩の内容、感覚を自己にとって最も身近な言語である方言に落とし込み、詩を味わうことを目標とした課題である。これも、言葉一つ一つの意味を確定し、言語感覚を研ぎ澄ましていく必要があるという点で、読み取りのレベルの活動であると言える。ただ、生徒は詩を読み味わうために一つ一つの言葉の感覚を重視して読むということが苦手だという印象を受ける。単に標準語訳では理解しきれない、詩の原文の持つ味わいを読み取らせることは、読み取りのレベルと言いながらも、生徒にとっては難しいものであり、「少し手を伸ばせば届くレベル」はこのレベルであると考えられよう[7]。

以上のような授業を通して、生徒はどのようなことを考え、どのような変化をしたのであろうか。

３．生徒の反応と変化

平成27年度７月と平成28年度７月に実施したアンケート項目（抜粋）とその結果は以下の通りである。

【自己評価】

①本文の読み取りにしっかり取り組めた。

②本文の内容を自分で理解できた。

③本文の内容をグループで理解できた。

④文法書や明説漢文を自主的に開くようになった。

⑤訳を作るのはおもしろく、自分でやってみようと思う。

【授業評価[8]】

②漢文を読むのはおもしろい。

④漢文の授業はおもしろい。

⑥自分で漢文を勉強しようという気持ちが強まった。

		平成28年度７月（発展）	平成27年度７月（標準）[9]
自己評価	①	３．６	
	②	３．０	
	③	３．８	
	④	３．４	
	⑤	３．０	
授業評価	②	３．２	２．７
	④	３．６	３．２
	⑥	３．６	３．１

それぞれの項目は、４を最高点として評価をさせ、その平均値をとったものである。数値的にはおおむね良好な結果である。ＡＬの効果として特に強調しておくべきは、自己評価の④、授業評価の⑥である。自己評価の④は、ＡＬ型授業で懸念される基礎知識の不足を生徒自身の自主学習により補えること、授業評価の⑥は、授業外で自ら漢文の学びに進もうとする意欲が向上し、結果的に学習時間が増えるであろうことが想定されるという点で重要である。平成27年度生は、平成28年度と比べると数値は低い。だが、標準クラスであり、もともと漢文を読むことが好きではなさそうに思えるのに（授業評価②）、学びへの意欲は持ち始めている（授業評価⑥）から、ＡＬ型授業の効果があったと見なせる。平成27年度も平成28年度も、夏休み明けに生徒と話をしていて、夏休みに今までになく古文や漢文の学習をしたという発言が目立ってあった

ことから、１学期間のＡＬ型授業だけでも相当な効果があったと言えよう。

また、模擬試験の成績等にも見るべきものがある。様々な都合上、詳細なデータは示せないが、平成27年度生については他クラスや全国平均と比べ、記述式の模擬試験の成績に有意な向上が見られた。ここから一般に懸念されている受験学力への対応も可能だと確認できる。

平成28年度生について、年度途中までで有意な差が見られなかった理由として、①平成28年度のクラスは発展クラスだったため、もともとある程度自分で学習する習慣がついていたこと、②教員の講義内容を受動的に吸収することが得意だった生徒が発展クラスに上がることができ、授業中の活動に対する積極性に欠ける生徒が平成27年度よりも多く、ＡＬ型授業になれるまでに時間がかかったため、まだ成果が現れる段階にないこと等が考えられる。②が考えられるのは、６月にとった生徒のアンケートの自由記述欄にあった「文法ももっとやってほしいです」という記述に顕著に表れているように、自ら覚えて活用することが大切だということを４月当初から何度も伝えているにも関わらず、受け身的な姿勢を見せている生徒がいたからである。ただ、この生徒も、７月のアンケートでは「今までの授業を通して思ったことは、自分が古文や漢文を読みたくないからと避けるだけ避けてきたため、語彙力や読解力が全くないということです。今年になって、自分で体系古典文法を開いてみたりするようになって、もっと知識を頭に入れなければならないなぁーと思いました。」という記述をしており、自ら学習する、主体的な態度が重要であることを認識し始めている。受験学力の点については、今後の推移を見守る必要があろう。

さらに、アンケートの自由記述欄を分析してみよう。

「古文や漢文を読むのは難しいけど、前よりは話の内容を自分でつかめるようになったのでよかった。（中略）夏休み中に助動詞や漢文の句法などを完ペキにしないといけないと思った。」

「今までに比べて体型古典やパンダ（引用者注：明説漢文）を見るようになったのはすごく思います。授業では、自分たちで考えることがいっぱいあるので難しいです。でもそんな活動も楽しいです！だんだんと古典が好きになりました。」

これまでより自分で内容をつかめるようになったというのは、文法に偏らず、自分たちで内容を構築していく活動を授業中に取り入れ続けた結果であろう。それだけに、授業の内容が難しく感じているが、同時に楽しさも感じており、古文の文法書や漢文の句法解説書（明説漢文）を利用して学びを進めようとしている姿が見られる。これらの記述と同様なものが８割程度の生徒の意見として書かれていた。主体的な学びに向かう態度の育成が進んでいることがうかがえる。

「山田先生が内容の話ではなく、文法の話をするなんていまいましかりけり。とても楽しい内容でした。夏休みもしっかりおこない（注：修行し）ます。」

極端な記述だが、こうした授業を続けると、文法などは自分でできるから授業では１人ではできないことをしたいという考えを持つ生徒が出てくる例として挙げた。アンケートの直前の授業で文法のおさらいの授業をしたことを承けての記述である。授業に求めることが高度化していることが推測される。これも主体的な学びに向かう態度の向上の表れであるし、同時に深い学びを求めていることもうかがえる。

その結果であろうか、平成28年度生に関して、次のような成果も見られた。講座に所属する生徒の平均点について、マーク式の模擬試験では、６月当初に全国平均を下回っていたが、センター試験漢文（50点満点）において、講座に所属する生徒の平均点が全国平均と比べて3.15ポイントほど高い成績を得た。詳細な検討は必要だが、この結果からも、いわゆる受験学力についても対応が可能だと言うことができそうだ。

このようにＡＬ型授業は生徒の主体的な態度の育成、あるいは深い学びへの導入に効果がある。漢文の授業であっても、ＡＬ型授業は有効であると言えよう。

おわりに

本稿では、漢文のＡＬ型授業の実践例を紹介し、それを受講した生徒のアンケート結果の分析をした。ＡＬ型授業の肝は、主体的で深い学びを作り出すことにあり、漢文の授業でも効果的であった。ただ、本稿での紹介した実践には課題も見られる。大きなところで言えば、生徒の受験に対応する学力の向上についての追跡調査が必要なことが挙げられる。さまざまな学年、

さまざまな学力層の生徒たちの、学力についての追跡調査を行うことにより精度の高いデータと分析を作る必要がある。今後の課題としたい。

---

[1]溝上慎一『教授パラダイムから学習成長パラダイムへの転換』（東信堂、2014年）
[2] 溝上慎一「大学教育におけるアクティブラーニングとは」（『高等学校におけるアクティブラーニング：理論編』東信堂、2016年）
[3]北崎貴寛「表現することで〈読むこと〉を深める漢文の授業の試み」（『国語教育研究』第52号、広島大学国語教育会、2011）
[4]西岡加名恵「パフォーマンス課題の作り方と活かし方」、『「活用する力」を育てる授業と評価　中学校』（学事出版、2009年）所収。
[5]三藤あさみ・西岡加名恵『パフォーマンス評価にどう取り組むか―中学校社会科のカリキュラムと授業づくり』（日本標準ブックレット、2010年）。
[6] この点について、西岡氏は「課題があまりにも難しいものであれば、子どもたちは手をつける前に諦めてしまう危険性がある。逆に簡単すぎれば、退屈してしまうことだろう。」（西岡加名恵編著『「逆向き設計」で確かな学力を保障する』明治図書、2008年）と述べる。
[7] もう少し上のレベルとしては、詩の批評・創作なども考えられるが、少ない授業時間の中ではそこまでは求められまい。
[8] ①③⑤については、同じ項目を古文で訊いたもの。
[9] 平成27年度は、同時期に自己評価についてアンケートをしていないため、空欄としている。

【国語科　古典（漢文分野）学び合い構想図①】

〈学校全体で求めるコンピテンシー〉

①学びに向かう力・人間性

②知識・技能　　③思考力・判断力・表現力

④協働力

①の具体化

A　表現の特色に注意しながら，叙述に即して読む力。

B　文章に書かれた心情を読み味わう力。

変換　　変換

〈評価規準・方法の設定〉

学校全体で求めるコンピテンシーが身に付いたか

→グループワーク，あるいは他グループへの発表を通して，課題を設定・解決し，自己の考えを表現できているかを観察する。

教科で求めるコンピテンシーが身に付いたか。

→協議中，あるいは発表の中で，本文中の表現の重要箇所を漏らさず捉え，説明できているかを見る（ワークシート回収）。

コンピテンシー育成方法の具現化

（次ページ）

〈授業の展開，及びパフォーマンス課題の設定〉

○教材　「韓信　背水陳」(『史記』)

○目標　本文の表現に即して，内容を的確に読み取る。　　(古典Ｂ　３内容（１）指導事項　イ)

○展開（全６時間）

・韓信が背水の陣をしくまでの流れを，板書をもとに考えてまとめる（１時間。①<u>A</u>)。

・背水の陣をしいてから，趙軍を破るまでの流れをグループで読み取る。その際，視覚的に理解できるように，戦略図を書くプリントとそれぞれの軍の名前が書いてあるカードを配付する。

・戦略図を用いて本文を読み取り，韓信の用いた戦略のポイントを整理する。(ここまで２時間。<u>①②③ＡＢ</u>)

・全体に向けてグループごとに，戦の流れ，韓信の戦略のポイントを発表する（１時間。①②<u>ＡＢ</u>)。

・グループでの口語訳作り（１時間。①②<u>ＡＢ</u>)。

・口語訳の返却と，句法等の解説（１時間。必要箇所の押さえをする程度)。

(括弧内の①～③，ＡＢは上記に対応。
太字下線部付きは，特に当該活動中に育成することを期待するもの)

【パフォーマンス課題】

○本質的な問い

漢文本文の内容を表現に即して理解するにはどうしたらよいか。

○永続的理解

漢文本文の内容を表現に即して理解するには，単純に現代語訳をするのではなく，視覚化できる道具を用意し，表現を追ってその道具を操り，イメージを確固たるものにしていくとよい。

Ｇ　本文にある情報を視覚化し，韓信の戦略のポイントを明らかにして，わかりやすく説明する。

Ｒ　説明者。

Ａ　同じ教材を読んでいる他のグループの生徒。

Ｓ　教室の中で，皆が同じ教材を読んでいる状態。

Ｐ　戦の流れを整理し，韓信の戦略のポイントをわかりやすく説明する。

Ｓ　戦の流れが説明できる力（読む力)。
戦略のポイントが説明できる力（思考力・表現力)。
読み取りのための方法をメタ認知できる力（メタ認知能力，関心・意欲・態度)